万葉集

出典

▼底本

新編日本古典文学全集「萬葉集」（小島憲之・木下正俊・東野治之　校注、平成六〔一九九四〕年～平成八〔一九九六〕年、小学館刊）によった。なお、指導書における年号の示し方については、七〇一年以前の、天皇名を年号としていた時代については、（　）内に示す際には年号自体を略し（　）外に示す際には「天皇」を略すこととした。

▼成立

二十巻、約四五〇〇首。写本の形で伝存するという意味での日本最古の歌集。新元号「令和」の出典としても近年再び注目されるが、依然としてその成立には多くの謎を残している。いつ、誰が、どのようにして、何のために編纂したのか、古来さまざまな成立説が提出され、いまだに確定をみない。大伴家持が編纂に関与していることはほぼ確かだが、家持単独の作業とは到底見なせない。一時になったのではなく、長い年月を経、多くの人の手によって、現行二十巻の形となったものであることは、間違いない。基本となるのは、「万葉集」を巻一～十六までと十七～二十の二部に分ける契沖以来の考え方で、第一部が天平十六、七（七四四、五）年頃にまとめられ、それに天平宝字三（七五九）年（一番新しい歌が集中してこの年詠まれた）以降、第二部が増補され、さらにそれに手が加えられて完成した、という見方である。現在最も体系的な成立説と見られる伊藤博説（「万葉集の構造と成立」上・下、昭和四十九年、塙書房）は、二十巻本の最終的成立を延暦元（七八二）～同二年頃とし、本書が世に知られるようになったのは、大同元（八〇六）年以降だとしている。

参考文献

❊教師用

▽注釈書

日本古典文学大系「萬葉集」　高木市之助他　岩波書店　昭三十二～三十七
新日本古典文学大系「萬葉集」　佐竹昭広他　岩波書店　平十一
日本古典文学全集「萬葉集」　小島憲之他　小学館　昭四十六～五十
新編日本古典文学全集「萬葉集」　小島憲之他　小学館　平六
新潮日本古典集成「萬葉集」　青木生子他　新潮社　昭五十一～五十九
「万葉集」（講談社文庫）　中西進　講談社　昭五十三～五十八
和歌文学大系「万葉集」　稲岡耕二　明治書院　平九～二十七
「万葉集全解」　多田一臣　筑摩書房　平二十一～二十二

▽入門書・研究案内・辞典

「うた」をよむ―三十一字の詩学」小林幸夫他　三省堂　平九
研究資料日本古典文学「和歌」大曾根章介他編
明治書院　昭五十八
別冊国文学「万葉集事典」稲岡耕二編　学燈社　平五
有斐閣選書「万葉の歌ことば辞典」稲岡耕二他編
有斐閣　昭五十九
「上代文学研究事典」小野寛他編　おうふう　平八
「万葉集ハンドブック」多田一臣編　三省堂　平十一
「古代和歌の世界」（ちくま新書）鈴木日出男
筑摩書房　平十一
「万葉私記」西郷信綱　未来社　昭四十五
「和歌大辞典」犬養廉他編　明治書院　昭六十一
「歌ことば歌枕大辞典」久保田淳他編　角川書店　平十一
「歌枕歌ことば辞典　増訂版」片桐洋一　笠間書院　平十一
「和歌とは何か」（岩波新書）渡部泰明　岩波書店　平二十一
「名歌名句大事典」久保田淳・長島弘明編
明治書院　平二十四
「和歌文学大辞典」古典ライブラリー　平二十六
「入門万葉集」（ちくまプリマー新書）上野誠　筑摩書房　令一
「万葉集の基礎知識」（角川選書）上野誠他
KADOKAWA　令三

❊ **生徒用**

「万葉集」（角川ソフィア文庫　ビギナーズ・クラシックス）
角川学芸出版　平十三
「万葉集入門」（岩波ジュニア新書）鈴木日出男
岩波書店　平十四
「和歌文学の基礎知識」（角川選書）谷知子
角川学芸出版　平十八
日本の古典を読む「万葉集」小島憲之他編　小学館　平二十
「図解雑学　楽しくわかる万葉集」中西進監修
ナツメ社　平二十三
「はじめて楽しむ万葉集」（角川ソフィア文庫）上野誠
角川書店　平二十四
「古典和歌入門」（岩波ジュニア新書）渡部泰明
岩波書店　平二十六
「和歌のルール」渡部泰明編
笠間書院　平二十六

図版解説　**〈飛鳥の春の額田王〉**

滋賀県立近代美術館蔵。昭三十九（一九六四）年制作。紙本著色、額装一面。安田靫彦（一八八四―一九七八）筆。第四十九回院展に出品。戦後における安田靫彦の最高傑作の一つであるのみならず、戦後の日本画の中でも傑出した作品の一つと位置付けられている。飛鳥古京、春霞がたなびく大和三山を背景に立つ額田王を、研ぎ澄まされた線描と鮮やかな色彩感覚で描く。

⇩ P 258

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

天皇、蒲生野に遊猟するときに、額田王の作る歌

格助・場所　サ変・体　格助・時間　格助・主格　ラ四・体

あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る

（枕）　カ四・用　カ四・用　係助・提示　マ上一・未　打・終　係助・反語　格助・主格　ラ四・体

額田王

（巻一・雑歌・二〇）

天智天皇が、蒲生野で薬狩りをなさったときに、額田王が作った歌

紫草を栽培する野を行きながら、その御料地を行きながら、（ああ、そんなことをして）野の番人が見るではありませんか、あなたが袖を振る姿を。

《主題》

（「人妻」である自らに）野外で袖を振って愛情を示す男性に対し、そのさまを野守に見咎められたらどうするのかと心配し、困惑する気持ちを訴えた歌。

指導上の注意点と発問例

●二五八ページ

問 **「君」（３行目）とは誰か。**

大海人皇子

語句の研究「君」の項を参照。

問 補 答 **「袖振る」（３行目）とは、どのような意味を持つ行為か。**

語句の研究

●二五八ページ

2天皇　天智天皇のこと。「天智」は「てんち」ともいう。中大兄皇子。父は舒明天皇で、母は皇極（斉明）天皇。歌中の「君」である大海人皇子の兄に当たる。持統天皇・大友皇子の父。大化元（六四五）年、中臣鎌足と図り大化の改新を断行した。天智六（六六七）年、近江の大津宮に遷都して、翌年即位した。晩年、弟の大海人皇子ではなく、子の大友皇子を後継者と定め、壬申の乱の要因を作った。なお、額田王が天智天皇の妻であったとされていたこともあったが、現在ではそれを否定する見解が有力である。

2蒲生野　琵琶湖の東南、近江八幡市から安土町にかけての野原。大津宮から直線距離で三〇キロメートルほど離れているから、日帰りでは無理で、おそらく蒲生野で一夜を過ごしてから、遊猟が行われたのだろう。

2遊猟　ここでは薬狩りのことであり、鹿茸（鹿の袋角）や薬草を取ることをいう。「狩り」が必ずしも獣狩りだけではないことを、

補 答 作者に対する「君」の愛情表現。袖を振ることはすなわち手を振ることになるから、作者に対して何らかの気持ちを表現していることは、容易に想像できるだろう。ここでは、もう一歩進んで、古代の文学における「袖」の持つ意味を説明しながら、その心情表現としての重要性に気づかせたい。古代の袖は筒袖（袂のない袖）が一般であり、さらに貴族の場合、その先に端袖をつけた。端袖は手が隠れるほど長いから、これを振るとひらひらと大変に目立つ。そもそも袖は魂の宿る場所であって、そういう袖を振ることは相手の魂に直接訴えかけようという、重い意味を持つ。それゆえ、求愛のしぐさになるのである。

問 **前問の行為に対して、「野守は見ずや」（3行目）に込められた作者の気持ちを簡潔に説明せよ。**

答 野の番人が見てしまうだろうから困る、という気持ち。

苺狩り・桜狩り・紅葉狩りなどの例から、理解させたい。この遊猟は、天智七（六六八）年五月五日に行われた。教科書で次に掲げている、このときの大海人皇子の歌（当該二十番歌に続く二十一番歌）の左注に、「時に、大皇弟・諸王・内臣と群臣、皆悉（ことごとく）従ふ」と見えるように、宮廷挙げての盛大な行事であり、贅を尽くした、華麗で優美な催しであったらしい。

2 額田王　額田王は、斉明天皇の時代から、専門歌人として宮廷に仕え、天皇の意を体し、その心を代弁するような歌を作っていた。斉明天皇の死後、天智天皇の宮廷で活躍。近江遷都時の天智天皇の代作歌（巻一―一七・一八）など、やはり前代の宮廷歌人としての公的詠作者の立場を継承している。ゆえに、額田王が天智天皇の妻であったとは、認め難いのである。ちなみに、この遊猟時に、彼女は三十歳前後であったと思われる。

3 あかねさす　本来は「茜色（黄色がかった赤）に照り輝く」の意であり、そこから、「日」「光」「昼」などに掛かる枕詞となり、また茜色との類似から「紫」などに掛かる、と言われている。枕詞の中でも、比較的被枕詞との意味の連関のたどりやすい語である。それでも、なぜ枕詞などという無駄な言葉を使うのだろう、という疑問は消えないだろう。僅か三十一文字しかないのに、どうしてわざわざさらにそれを狭めるようなことをするのか、と。そこでぜひ、枕詞が「声の文化」の所産であることを知らせたい。声に出して唱えることで、その言葉を皆でありありと体感して共有する、呪言・呪文としての意味を持っていたのだ。授業でも、特に繰り返しての音読を促したい。ここでは、群臣打ち揃って紫野を行く行為を、呪的に意義づけているのである。

3 紫野行き標野行き　「標野」は杭や縄などで囲って立ち入りを禁じた丘陵地。「しめ」は神や特定の人の領有であることを示すしるしのこと。ここでは、天皇のための土地である。また、この二つの「行き」の主語が誰かについては説が分かれている。「君」すなわち大海人皇子を主語と見るか、野守と見るか、の両説が対立していたが、近年は、君も野守も作者も含めた、この地にいる集団全て、という見方が目立つようになった。もとより、研究者の間で説が対立しているような問題を高校生に問うのは酷で

はある。ただ、個々の語の解釈を終えた後、「学者でも意見が分かれているのだが、君たちは誰が主語だと思うか」などと発問してみてもよいかもしれない。決定的な根拠があるわけではないから、要はどう読んだら一首が魅力的に解釈できるか、にかかっている。集団の全て（すなわち「我々」）とする説は、歌をもって天皇に仕え、その宮廷の意を代表して歌に表した額田王の立場にふさわしく、また口誦文芸の性格を色濃く残す、この歌の大らかな調べに合致するともいい得るので、本書ではこの立場に立つ。

3 野守は見ずや　「や」は反語の係助詞の文末用法。終助詞とする説もある。直訳すれば「野守は見ないでしょうか、いや見るでしょう」となり、「見るではありませんか（私は困ってしまいます）」、と相手に訴えている意となる。「野守」はこの標野の番人。人に知られたら困る、という気持ちで、その「人」を分かりやすく代表する形で野守を持ち出した。天智天皇を寓意すると見る説もあるが、そこまで考える必要はないだろう。さらに、この部分を倒置法とする説と挿入句とする説がある。倒置法とした場合は、「君が袖振る（のを）野守は見ずや」となり、「野守は見ずや」を強調した形、挿入句とした場合は、「紫野行き標野行き（野守は見ずや）君が袖振る」となり、詠嘆を込めた連体止めとなる。ここは、「知られたら困る」という点を恥じらいつつ訴えている（強調している）として、倒置法でとった。

3 君　大海人皇子（後の天武天皇）を指す。それが分かるのは、この歌に答えた歌がすぐ後に見られるからで、次歌と共に学習したい。

額田王は、確かに早くに大海人皇子の妻となり、十市皇女（とおちのひめみこ）を生んだ（十七、八歳頃か）。その後天智の後宮に入ったが、それは「后妃」としてではなく（天智の后妃関係記事には見えない）、歌などの職掌をもって仕え、公的な役割を担う存在としてであろうと推測される。遊猟とはみやびの粋を尽くした饗宴だから、恋のやりとりは、その興を盛り上げ祝福することになるのである。額田王の歌は、その場の多くのうら若い乙女たちの心を代表し、代弁していると見られる。恋愛は、古来文化であった。「人妻」は、天智の後宮に入って、新しい律令国家建設を文化の側から支えている我が妻に対して投げかけられた言葉である。おそらく、拍手喝采を浴びたことだろう。

大海人皇子（六三？～六六）は、天智天皇の同母弟。天智天皇の皇太子となったが、次第に両者の間には亀裂が生じ、天智の晩年には後継者とされた大友皇子と対立し、出家して吉野に逃れた。天智の死後、壬申の乱（六七二年）で大友皇子に勝利し、即位した。天皇中心の政治を目指す天智の政策を継承・発展させ、律令国家の基礎を築いた。

作者

額田王

生没年未詳。舒明六（六三四）年～九（六三七）年頃の生まれか。持統朝（六七～六九七）での作歌が確認できる。万葉第一期を代表する女流歌人。父は鏡王。大海人皇子との間に十市皇女を生む。斉明・天智・天武天皇の宮廷で歌人として活躍した。

鑑賞

教科書で次に掲げる大海人皇子の歌と対にして味わいたい。

「あの方は私に袖を振ってお気持ちを表しています。野の番人が見つけたらどうするのでしょう」と、作者はいかにも困惑した様子である。続く男性の歌の「人妻」の語から、この二人は秘密の、不倫の恋をしているものかと思わせる。

しかし、そうであるなら、『万葉集』はこのやりとりを相聞（＝男女や親子・兄弟姉妹、友人の間のような親しい相手と贈答した歌が含まれるが、特に恋の歌が多い）に分類したはずである。ところが、この歌は雑歌（＝相聞・挽歌に含まれない内容の歌を総括する）に収められている。『万葉集』の雑歌は、実は公的な場での歌が多く集められており、額田王は宮廷歌人として、現代で言えば国際試合の前に「君が代」を独唱したりするような、その場に集う多くの者たちの気分を代表する役割を担う歌姫であった。語句の研究にふれたように、遊猟は宮廷挙げての盛大な行事である。このやりとりは、そこで催された宴席を盛り上げるための座興であったと考えられるのである。

衆人環視の場で秘密の恋を告白する－それはもとより尋常な出来事ではない。ただ、見守る皆が固唾をのんで、恋する二人に注目し、そのなりゆきに心を震わせ、拍手喝采さえするという場は、確かに存在する。我々は一般に、そうした二人の立つ空間を、「舞台」とか「劇場」と呼んでいる。二人の演技は、かつてそうした解釈も行われていたように、現代人をしてその恋を真実かと錯覚させるほどのものであったのである。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

皇太子（わうたいし）　の　答（こた）ふる　御歌（みうた）
格助・主格　八下二・体

紫（むらさき）　の　にほへる　妹（いも）　を　憎（にく）く　あらば　人妻（ひとづま）　ゆゑ　に　我（あれ）　恋（こ）ひ　めやも
格助・比喩　八四・已　存・体　格助・対象　形ク・用　ラ変・未　接助・順仮　格助・原因　八上二・未　意・未　係助・反語

大海人皇子（おほあまのみこ）

（巻一・雑歌・二一）

皇太子が応えて詠んだ御歌

紫草のように美しいあなたをもし嫌いだったとしたら、人妻であるのに、どうしてこんなにも恋い慕ったりしようか。

《**主題**》

人妻である相手を紫草の美しさに喩えながら、深い愛情を率直に伝えようとする歌。

指導上の注意点と発問例

●二六〇ページ

問　**この前の額田王の歌とは、内容的には相聞歌に属するものであるが、雑歌として収録されているのはなぜか、説明せよ。**

答　純粋な恋歌の応酬ではなく、天皇が猟をして遊ぶという公的な行事の宴席での歌であるから。

問　**「妹」とは誰のことか。**

語句の研究

●二五八ページ

4皇太子　大海人皇子のこと。（前歌の語句の研究「君」の項を参照）

5紫　「紫」はムラサキ科の多年草である紫草。夏に白い花をつけ、根からは赤みを帯びた紫色の染料が採れる。ここでは比喩を表す格助詞「の」に接続して「にほふ」にかかる。額田王歌の「紫野」に対応している。

5にほへる　動詞「にほふ」はここでは物が美しく輝くように映えることをいう。色が他の物を染めることもいい、そのイメージをも含意したものか。周知のことであるが、古来、女性の美しさは草花に喩えられることがある。この歌のように、その美しさが「にほふ」という語で表されているのを知ると、我々の考える「美しさ」は、もともとは視覚だけで感じるものではなかったのではないか、と思い至る。何らかの刺激に対し、本来起こるはずの感覚のみならず、異なる種類の感覚も自動的に生じるという現象―これを「共感覚」という。「にほふ」という古語は、そのような感覚と何らかの関わりを持つものかもしれない。

答　額田王

補　語句の研究「妹」の項を参照。

問補答　**「紫のにほへる」とは、誰の、どのような様子か。**

答　「妹」が、紫草のように、照り映える美しさであるということ。

補　語句の研究「紫」「にほへる」の項も参照。「紫の」の「の」は、格助詞（比喩）で、主格ではない。「にほふ」はハ行四段の自動詞で、輝くような美しさを放つことをいう。この歌で「にほふ」のはあくまで「妹」である。

5妹　男性からいう妻、恋人、姉や妹などといったごく親しい女性の呼称。女性側から男性をさしていう「背」に対応する。額田王歌の「君」を受けている。

5人妻ゆゑに　人妻であるのに。かつて、額田王は初め大海人皇子の妻であり、後に天智天皇の寵愛を受けたとされたことから、三角関係を想起させる把握がなされていたが、現在そうした解釈は否定されている。（前歌の語句の研究「君」の項も参照）

5恋ひめやも　「恋ふ」はハ行上二段活用なので「恋ひ」は未然形で「め」は意志の助動詞の已然形。やもは詠嘆を込めた反語。係助詞が二つ重なったかたちと考える。

作者

大海人皇子

舒明三（六三一）年?〜朱鳥元（六八六）年。後の天武天皇。天智天皇の同母弟で、兄の死後に生じた後継者争いに端を発する壬申の乱（六七三年）に勝利して即位した。天皇中心の政治を目指す天智の政策を継承・発展させ、律令国家の基礎を築いた。万葉第一期・二期の歌人で、漢籍を典拠に踏まえるなど、荘重な響きを持ちながら、理知・機知にも富み、闊達な歌風と評されている。

鑑賞

二人のやりとりが宴席の座興であったらしいことは、先の鑑賞にも触れた。ここでは二人のやりとりを別の角度から見てみよう。

歌だけを取り出せば、女性からの呼びかけに対して男性が応えたかたちになっている。ただ、額田王の表現をそのまま受け取ると、このやりとりにおいて、袖を振ることで愛情を先んじて示したのは大海人皇子の方であったことになる。古代の物語作品のなかの男女の贈答においてもしばしば指摘されることであるが、古代の男女による恋のやりとりは、男性からのアプローチによって始まるのが一つの約束事になっているようなところがある。そのような定型の存在自体、和歌によるコミュニケーションが、言ってみれば共同参画型の演技的な側面を持つことの一つの証左であるようにも思われる。男は人目も憚らず袖を振った。女は「野守は見ずや」と困惑してみせ、それに対して男は「人妻ゆゑに」と明言して思いをあらためて伝えてくる。このやりとりは、その定

型にそのままあてはまるのである。つまり、男性の愛情表現を女性はそのまま受け容れることなく否定的に切り返す、それに対して男性はさらに真摯なメッセージを投げかけてくる…。古代の恋のやりとりは、概ねこの「型」の繰り返しによって深化していくのである。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

軽皇子、安騎の野に宿らせる時に、柿本朝臣人麻呂が作る歌

軽皇子（かるのみこ）、安騎の野（あきの）に　宿（やど）らせ　る　とき　に、　柿本朝臣人麻呂（かきのもとのあそみひとまろ）　が　作（つく）る　歌（うた）

格助・場所　ラ四・未　尊・已　撰者→軽皇子　完・体　格助・時間　格助・主格　ラ四・体

東（ひむがし）の　野（の）に　かぎろひ　の　立（た）つ　見（み）え　て　かへり見（み）すれ　ば　月（つき）　傾（かたぶ）き　ぬ

格助・体修　格助・場所　格助・主格　タ四・体　ヤ下二・用　接助・単接　サ変・已　接助・順偶　カ四・用　完・終

（巻一・雑歌・四八）

軽皇子が、安騎の野で宿泊なさったときに、柿本朝臣人麻呂が作った歌

東方の野に明け方の陽光が輝くのが見えて、振り返って見ると月が沈みかけていた。

《主題》

野で一夜を過ごし、夜明け方に見た東方の曙光と西方の月の光景とを、スケール大きく描いた歌。

指導上の注意点と発問例

●二五八ページ

問　「かへり見すれば」（7行目）を現代語訳しなさい。

補 答　振り返って見ると。

「かへり見すれ」は、「後ろを振り返る」の意の複合動詞「かへり見る」の連用形が名

語句の研究

●二五八ページ

6せ

上代（奈良時代）の助動詞「す」の活用

接続は四段・サ変動詞の未然形に付く。

未然	連用	終止	連体	已然	命令
さ	し	す	す	せ	せ

6柿本人麻呂　この歌は、「軽皇子、安騎の野に宿らせるときに、柿本朝臣人麻呂が作る歌」と詞書（題詞）を付した長歌（巻一―四五）の「短歌」四首（巻一―四六～四九）中の第三首である。「短歌」は「反歌」（長歌の内容を要約したもの）にほぼ等しいが、「反歌」よりも長歌に対する独立性が高い。

6軽皇子　後の文武天皇（六三年～慶雲四（七〇七）年）のこと。草壁皇子の子で、母は元明天皇。

6安騎の野　現在の奈良県宇陀市一帯の野。軽皇子はこの地に遊猟に訪れて宿泊し、人

詞化したものに、サ変動詞が続いて付き、一語化してサ変動詞となったものの已然形。「ば」は順接確定条件の接続助詞。東方の「かぎろひ」を見つめていた姿勢から、後ろを振り返ってみた動作を表す。この「かへり見すれば」については、俳優の身振りめいていて嫌味だ、などという伊藤左千夫の批判もあるが、人麻呂は自然の殺気とも言うべき気配を感知して振り返ったのであって、そこには地球のリズムと人麻呂の肉体のリズムが感応し合った一瞬が示されている、とする佐佐木幸綱氏の見解（「万葉へ」）が興味深い。動物が地震を予知する能力を持つように、古代人は、より自然の動きを察知する力を持っていたろうし、人麻呂のような優れた詩人ならなおさらだと言えよう。そうした自然と一体化していた古代人の感覚に思いを馳せさせたい。

問　どの方角からどの方角への視点の移動を表しているか。

答　東から西。

問　「傾きぬ」（7行目）の「ぬ」を文法的に説明せよ。

答　完了の助動詞「ぬ」の終止形

問　この歌は、作者が軽皇子に従って、宇陀（奈良県宇陀市）の安騎の野に旅したときの一首である。この安騎の野は、軽皇子（後の文武天皇）の父草壁皇子がかつて猟に遊んだ地でもある。草壁皇子は若くして病死した。このような歴史的背景を踏まえてこの歌を解釈した場合、(1)「東の野に立つかぎろひ」、(2)「西に傾く月」は、それぞれ誰を例えたものと考えられるか、答えなさい。

答　(1)軽皇子　(2)草壁皇子

問　この歌は、長歌に添えられた四首の反歌のうちの第三首である。前問の歴史的背景に注意し、反歌第一、第二、第四の次の三つの歌に共通する主題を簡潔に答えよ。

安騎の野に宿る旅人うちなびき眠も寝らめやも古思ふに
ま草刈る荒野にはあれどもみち葉の過ぎにし君の形見とぞ来し
日並の皇子の尊の馬並めてみ狩立たしし時は来向かふ

答　亡き草壁皇子への追慕。

問　この歌は、「万葉集」の原文では、次のように表記されている。このような表記を何と言うか。

東野炎立所見而反見為者月西渡

答　万葉仮名

麻呂はそれに付き従っていた。この遊猟は、持統六（六九二）年の冬のことかと推定されている。

7束　「ひむがし」は上代には「ひむかし」と清音であったと言われている。「日向し」の意で、本来は日の出に向かう方角のこと。ここでも、単に方角を指すのではなく、日の出が意識されている。

7野　安騎の野の東方の野。軽皇子の父である草壁皇子は、かつて安騎の野に遊猟に訪れており、今回の軽皇子の遊猟は、その追懐の意味を持っていた。そのことは、一連の「短歌」四首のうち、

ま草刈る荒野にはあれどもみち葉の過ぎにし君の形見とぞ来し（巻一―四七）
日並の皇子の尊の馬並めてみ狩立たしし時は来向かふ（巻一―四九）

の「過ぎにし君」および「日並の皇子の尊」が草壁皇子のことを指していることから明らかとなる。だから、掲出歌の背後にも、個人を追懐する、ある意味で挽歌のような思いが潜在していると考えられる。

7かぎろひ　この場合の「かぎろひ」が何を指すかについては諸説があり、厳密に言えばその実態は確定していない。通常「かぎ

ろひ」といえば陽炎（一般に春のものとされる）を指すことが多いが、この遊猟は冬のことと見なされるので、不自然。曙光、もしくは日の出前に東の空が明るくなること、と見なすのが適切と思われる。一連の四首の第一首、

安騎の野に宿る旅人うちなびき眠も寝らめやも古思ふに（巻一―四六）

では、「眠も寝らめやも古思ふに」とあった。一行は、草壁皇子を偲んでまんじりともせずに、冬の一夜を安騎の野に野宿して明かした。そうしてとうとう、東の空にさす光を迎えることとなったのである。

7月傾きぬ　「万葉集」原文には「月西渡」とあり、「月にしわたり（る）」などと訓まれることもあったが、義訓と見て現在の訓みが定着している。月がまさに落ちかかったという、動的な把握が際立つ。東の果てから西の向こうまでを巡る壮大な空間が、動的に、行動的に摑み取られているさまに注目させたい。

光のさすのを見て、反対の西側を「かへり見」ると、月が沈みかけていたというのであるが、この歌はその「かへり見」によって、東西の対照的な景、明と暗、未来と過去とを括りまとめているのではないか。夜を徹して偲んだ草壁皇子は月の沈むようにやがては過去の存在となり、間もなくのぼる朝日から始まる新しい朝は軽皇子の未来にも重なっていく。既に次の朝はやって来ようとしているのだが、故人のいた過去はいつまでも惜しまれるものとしてある。やや大袈裟にさえ映る主体の「かへり見」は、それを惜しまずにはいられない者の一人としての行動でもあるのだろう。

作者

柿本人麻呂

生没年未詳。万葉第二期の歌人で、「万葉集」を代表する存在。初出仕は天武朝（六七三～六八六）で、その後、持統・文武両朝（六八六～七〇〇）の宮廷歌人として活躍した。和銅三（七一〇）年の奈良遷都前に没したか。宮廷儀礼歌に優れるとともに、古代抒情詩としての和歌を確立した。「万葉集」編纂の資料となった「柿本朝臣人麻呂歌集」は、その作歌の集とも、人麻呂が編纂した集とも言われている。

鑑賞

安騎の野には、かつて軽皇子の父である草壁皇子も遊猟に訪れていたから、軽皇子の一行は亡き父にゆかりの地で宿営をはって、故人を偲びながら一夜を過ごしたのである。先立つ人麻呂の長歌に「夕さり来ればみ雪降る」というから、季節は冬。東の空に曙

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

山部宿禰赤人、富士の山を望む歌　　山部赤人

天地の分かれし時ゆ神さびて高く貴き駿河なる富士の高嶺を
格助・主格　ラ下二・用　過・体　格助・起点　バ上二・用　接助・単接　形ク・用　形ク・体　在・体　格助・体修　格助・対象

天の原振りさけ見れば渡る日の影も隠らひ照る月の光も見え
マ上一・已　接助・順偶　ラ四・体　格助・体修　係助・列挙　ラ四・未　継・用　ラ四・体　格助・体修　係助・列挙　ヤ下二・未

ず白雲も い行きはばかり時じくそ雪は降りける語り継ぎ言ひ継ぎ行か
打・用　係助・列挙　ラ四・用　形シク・用　係助・強意（係）　係助・強意　ラ四・用　詠・体（結）　ガ四・用　ガ四・用　カ四・未

む富士の高嶺は
意・終　格助・体修　係助・提示

（巻三・雑歌・三一七）

反歌

田子の浦ゆうち出でて見れば真白にぞ富士の高嶺に雪は降りける
格助・経場　ダ下二・用　接助・単接　マ上一・已　接助・順偶　格助・変化　係助・強意（係）　格助・体修　格助・場所　係助・強意　ラ四・用　詠・体（結）

（巻三・雑歌・三一八）

山部宿禰赤人が、富士山を遠く眺めて（作った）歌

天と地が分かれた（神代の）時代から、神々しくて高く貴い駿河にある富士の高嶺を、大空はるかに振り仰いで見ると、（富士山のために）空を渡る太陽の光も隠れ、照る月の光も見えず、白雲も進みあぐね、いつも雪が降っているよ。（まだ見ぬ人に）語り伝え、後の世までも言い継いでいこう、（この）富士の高嶺のことを。

反歌

田子の浦を通って（富士山の眺めがよい所に）出て見ると、真っ白に富士の高嶺に雪が降り積もっていることだよ。

《主題》
長歌－富士の霊威あふれる神聖な姿を壮大に描いた、富士山崇拝の歌。
反歌－旅先で富士を見て感動し、その姿をありのままに描いた歌。

指導上の注意点と発問例

●二五九ページ

問 **詞書に「富士の山を望む歌」（1行目）とあるが、「望む」は、ここではどのような意味か、別の言葉で言い換えよ。**

答 遠く眺める。望見する。

問 **「天地の　分かれし時ゆ」（2行目）を現代語訳し、どのような意味を持つ表現か考えよ。**

答 「天と地が分かれた（神代の）時代から、天地開闢の昔から」など。世界の始まりから説き起こすことによって、悠久の時と壮大な空間を示し、富士の神聖性や威厳を強調した、神話的な表現。

問 **「白雲も　い行きはばかり」（3行目）とは、どのような意味か。**

答 「白雲も（富士の霊威によって）進みあぐね」。富士の威厳を白雲に対する擬人法によって間接的に表している。

問 **「天の原」を現代語訳しなさい。**

答 広々とした大空。

語句の研究

●二五九ページ

1富士　富士山。「万葉集」では「布士」「布自」などと表記されているが「不盡」（不尽）が最も多く、その永遠性を賛美しようとする意識を表す。「富士」の表記はない。

2天地の　分かれし時ゆ　「天地開闢の昔から」という神話的な慣用句。「ゆ」は上代の格助詞で、動作の時間的・空間的起点を表す。「…以来」。中古以降は「より」が用いられた。

2神さびて　「神々しくて」。「さぶ」は名詞に付いて、「…らしくなる、…に見える」の意の動詞を作る接尾語。

2駿河なる　「駿河」は旧国名。現在の静岡県中・東部。「なる」は存在を表す助動詞「なり」の連体形。

2天の原　振りさけ見れば　「天の原」は「広々とした大空」。「振りさけ見る」は「振り仰いで遠くを眺めること」。「さく」（カ下二）は、「放つ」「遠くへやる」が原義で、動詞の連用形について①「…をして思いを晴らす」②「見さく」「振りさく」の形で「遠くを眺める」「振り仰ぐ」の意で用いられた。ここでは②。「富士の高嶺を大空はるかに振り仰いで見ると」。

3渡る日の　影も隠らひ　「渡る日の影」は「空を渡る太陽の光」。「影（景）」は「光」。「かげ」の原義は「光り輝く、照り輝く」（カゲロフ・カガヨフなどに通じる）だが、転じて光を受けることによって生じる光と闇、または光によって照らし出される像を意味するようになった。「隠らひ」は「隠る」（ラ四）の未然形「隠ら」＋上代の反復・継続の助動詞「ふ」（四段型活用・未然形に接続）で、「ずっと隠れている、見え隠れする」の意。「ふ」が助動詞として種々の語に付いたのは上代のみ。「渡る日の…」と「照る月の…」は太陽と月の光が富士に隠されることを対句風に詠む。

4い行きはばかり　「い」は上代に多く用いられた接頭語で、動詞に付いて、調子を整えたり意味を強めたりする。「行きはばかり」は「障害（富士）があって進めない」。ここでは、擬人法で、雲も富士山の霊威によって、近づこうとしないさまをいう。「富士の嶺（ね）を高み恐（かしこ）み天雲もい行きはばかりたなびくものを」（巻三－三二一・高橋虫麻呂）など、富士の霊威が自然に作用す

問「影も隠らひ」の「影」を、別の言葉で言い換えなさい。

答 光

問「富士の高嶺は」（4行目）は、どこへ続くか。

答 語り継ぎ　言ひ継ぎ行かむ

問「うち出でて見れば」（7行目）を現代語訳し、どのような状況を表しているのか、説明せよ。

答「（富士山の眺めがよい所に）出て見ると」。今まで山陰などの障害物によって遮られていたが、視界の開けた場所に出て、ついにその姿を眺め得た、という富士を見た喜びが込められている。

問「反歌」（6行目）とは、どのような歌か。

答 長歌の後に添え、長歌の大意を要約したり、長歌に詠みきれなかった気持ちを補足したりする短歌。

問「田子の浦ゆ」（7行目）歌中より上代語を一つ指摘しなさい。

答 ゆ

問「ま白にそ」（7行目）について、
(1)「そ」を文法的に説明せよ。
(2)「ま白にそ」という言葉に込められた作者の気持ちとして、適切なものを次の中から選べ。
(ア)聖なる美への畏怖と感動。

るさまは多く詠まれた。

4 時じくそ　「そ」は強意の係助詞。実際に見たときの印象が込められている。なお、係助詞「そ」は上代でも清音・濁音両方が見られるが、「そ」の形が本来であったと見られる。「時じく」は上代の形容詞「時じ」の連用形。「じ」は形容詞を作る接尾語で、打消の意を含む。「時節に関係なく、いつも」。「そ」は強意の係助詞。「時ならず雪は降っている」。古代、雨や雪など、天から降るものを神聖な呪力が宿された「天つ水」とする信仰があった。その頂が常に雪に包まれている富士の神秘を強調した表現である。進みあぐねる雲、消えることなき雪、という景によって富士の尊厳や霊妙さを示した表現。

4 語り継ぎ　言ひ継ぎ行かむ　（まだ見ぬ人に）語り伝え、後の世までも言い継いでいこう」。「継ぐ」（ガ行四段）は、「跡を継いでいくこと」。なお原文は「語告」と表記。言葉を伝達する意の「告ぐ」は、下二段動詞で「告ぎ」という活用形はないが、「継ぐ」と同根の語であり、意味の類似からの借用か。「継ぐ」は、長く続くものが絶えないように繋いでいくこと。後に大伴家持が越中の立山を詠んだ「万世（よろづよ）の　語らひぐさと　いまだ見ぬ　人にも告げむ」（巻十七－四〇〇〇）はこの作に学んだ表現。

7 田子の浦ゆ　「田子の浦」は現在の静岡県静岡市清水区由比倉沢・蒲原辺りの海辺（現在の「田子の浦」は静岡県富士市にあり、別の場所）。上代の格助詞「ゆ」は経過する場所を表す。「…を通って」。なお、「新古今和歌集」や「百人一首」では「田子の浦にうち出でて見れば白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ」という形で収録されており、田子の浦自体に出て富士を眺めている歌になり、位置関係が異なっている。中古語には「ユ」に当たる一音節助詞はなく、「万葉集」の「ユ」は「ニ」または「ヲ」と訓読されているが、これは平安時代以来の万葉集訓読の一つで、撰者の改作ではないと見られている（小島吉雄「新古今和歌集の研究」）。

7 うち出でて見れば　「うち」は語調を整える接頭語。「（富士山の眺めがよい所に）出て見ると」。歌の詠まれた位置に関しては古来諸説ある。薩埵（さった）峠を越えた辺りか。

7 ま白にそ　「ま（真）」は名詞や形容詞に付いて、真実・純粋・強調などの意を添える。

(イ)厳しい自然への闘争心。
(ウ)そびえ立つ山への羨望。
(エ)下界の汚らわしさへの嫌悪。

答 (1)強意を表す係助詞。結びの「ける」と呼応している。(2)(ア)

問 **「降りける」の「ける」を文法的に説明しなさい。**

答 詠嘆の助動詞「けり」の連体形。「そ」の結び。

問 **長歌と反歌を比較し、二首の関係を考えよ。**

答 長歌は、後代へと語り継ぐべく、富士の霊威あふれる神聖な姿が言葉を尽くして強調されている。一方、反歌は、富士を見た感動がありのままの風景描写に込められている。その背後に、長歌に詠まれた富士の霊威や神聖さへの感応があることを理解しておきたい。「長歌の『神さびて高き』富士の観念を鮮明な映像に具象化したのが短歌」（和歌文学大系「萬葉集(一)」）。

問 **この歌は、「新古今和歌集」や「百人一首」では次のような歌で採られている。両歌の相違をまとめ、「万葉集」と「新古今和歌集」の歌風の違いについて答えよ。**

田子の浦にうち出でて見れば白妙（しろたえ）の富士の高嶺に雪は降りつつ

答 ①「ゆ」が「に」になっている点…「ゆ」による立体感や瞬間的な感動が失われ、「に」によって平面的、静止的なものとなっている。②「真白にそ」が「白妙の」になっている点…「真白にそ」は素朴で印象的であるが、「白妙の」はやや観念的で類型的である。③「降りける」が「降りつつ」になっている点…「降りける」は雪が降り積もった実景であるが、「雪は降りつつ」は意味の上で現に雪が降っていることになり、曖昧なイメージになっている。これらの相違からみて、素朴に感動を歌う万葉集と、観念の世界に余情を醸し出そうとする新古今和歌集の違いが見られる（「真白にそ」という荘厳な聖なる美に対する感動が、新古今和歌集では、王朝風に「白妙の」という優美な姿として捉えられている）。

ここは雪の白さを強調した表現。「真っ白に」。

7 雪は降りける　「ける」は詠嘆の助動詞「けり」の連体形で係助詞「ぞ」の結び。「けり」の本義は「そういう事態だと今気がついた」という気づきにある。ここでは「まさしく富士の偉容を今実際に発見した」という清新な喜びを感じ取ることができる。

〈補説〉「万葉集」には富士を神とする思想が見られるという（久松潜一「万葉集考説」）が、この長歌も、霊峰富士の威厳や神聖さを、言葉を尽くして描いた歌である。日・月・雲・雪と壮大な視点でそれぞれの景を切り取りながらその姿を崇め、最後に「語り継ぎ　言ひ継ぎ行かむ」とその永遠を祈るのである。言葉の伝承は神聖な行為であり、文学の起源であった。授業でも、雄大な富士を想起しながら繰り返し音読し、対句的表現やリズムを味わいたい。なお、古代の富士山はその火や煙のさまがしばしば詠まれている。

反歌では、田子の浦から富士が眺望できる地点への移動、さらに近景の海辺から遠景の富士山頂へと焦点が合わせられるという視点の移動があり、読者も富士を眺め得

た喜びを共に味わえるような構造となっている。「富士山が見えた」という感慨は生徒にとっても身近なものであろうが、古人にとって富士がどのような存在であったか、長歌と併せて話し合ってみたい。

作者

山部赤人

生没年未詳。万葉第三期の歌人。聖武朝前半の行幸に従駕した宮廷歌人。神亀元（七二四）年～天平八（七三六）年までの作歌が知られている。宮廷賛美の精神を、清明な風景描写によって表した。「古今和歌集」仮名序・真名序は、柿本人麻呂とともに「歌仙」としてその名を記し、最大級の敬意を払っている。

鑑賞

〈語句の研究〉等でふれたように、長歌の語ろうとする富士の在り方は、自然の景観というより、まるで山そのものを神と仰ごうとするかのようである。カメラも高速移動可能な乗り物もなく、絵に描いて保存するための紙さえも一般的でなかった時代、富士の姿は直接的にも間接的にもそう簡単に目にすることはできなかったであろうし、赤人の長歌の語る霊峰富士の威容は、聞く者にとってもはや神話の世界のそれであったろうと思われる。

意図して対句のように畳みかけられる観念的な風景表現の長歌とは異なり、反歌はまさしく叙景歌（主観をまじえず風景表現のみで構成された歌）である。一首の主体は、田子の浦に出るという行動によって、周辺の風景をいったんは視界に入れながら、冠雪する白い富士の山頂を遠景に捉えた。ここに、空間的な奥行きを持った、富士を眺望する景の雛型が生まれ、広く愛される一つの典型となっていったものかと思われるのである。それは『新古今和歌集』や『百人一首』にもこの歌が選び入れられたことにも表れていよう。

品詞分解と現代訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

山上憶良臣、宴を　まかる　歌

格助・起点　ラ四・体（謙）撰者→宴席

憶良ら　は　今　は　まから　む　子　泣く　らむ　それ　その　母　も　我　を

係助・区別　係助・区別　ラ四・未（謙）憶良→宴席　意・終　カ四・終　現推・終　接　代　格助・体修　係助・同類　代　格助・対象

待つ　らむ　そ

タ四・終　現推・終　係助・強意

（巻三・雑歌・三二七）　山上憶良

山上憶良臣が、宴会から退出するときの歌

憶良めは、今となってはもうおいとまいたしましょう。（家では）子供が泣いているでしょう。ええ、その母親も私を待っていることでしょう。

《主題》

宴席から退く際に、家族が待っているから、とおどけて挨拶した歌。

指導上の注意点と発問例

●二五九ページ

問　**「憶良らは今はまからむ」（9行目）を現代語訳せよ。**

答　「憶良めは今となってはもうおいとまいたしましょう」。

補　「ら」は謙遜の接尾語。「まかる」は貴人のもとから退出する意。

問　**◉「憶良らは……」（9行目）の歌はどこで切れるか。**

答　二句切れ・三句切れ

補　第二句の末尾は意志の助動詞「む」の終止形、第三句の末尾は現在推量の助動詞「らむ」の終止形。第二句までと第三句と第四句以降ではそれぞれ述語動詞の主語が異なっており、意味の面からも二度の句切れが認められる。

問　**「憶良らは」（9行目）の「ら」は複数の意ではなく、へりくだる気持ちを表す接尾語である。「憶良らは」を現代語訳せよ。**

答　憶良めは。

問　**「まからむ」（9行目）の「まから」につい**

語句の研究

●二五九ページ

9 憶良らは　「ら」は名詞や代名詞に付いて、謙譲の意を表す接尾語。本来複数を示すが、相手を含めない場合は謙遜となる。「（私）憶良めは」。

9 今はまからむ　「今は」は「今となってはもう」。「罷る」は「貴所や貴人のもとから退出する」意の謙譲語。「おいとまする」。ここでは宴席から退出することで、宴の出席者に対する敬意や親愛の情を示している。

て、

(1)「まから」を文法的に説明せよ。

(2)「まかる」と反対の意味を持つ古語を答えよ。

答 (1)謙譲の動詞（ラ行四段活用）「まかる（罷る）」の未然形。「尊い所から退出する」の意。「退き出る」の謙譲体。(2)まゐる。まうづ。

問「泣くらむ」（9行目）と「待つらむ」（9行目）の「らむ」について、

(1)二つの「らむ」を文法的に説明せよ。

(2)二つの「らむ」は「現在推量」の意であるが、「現在推量」の「らむ」が用いられているのは、なぜか。

答 (1)現在推量　(2)宴席から自分の家のことを想像しているから。

問「その母も」（9行目）について、

(1)「その」の「そ」は何を指すか。

(2)「も」の意味を踏まえて、「その母も」を現代語訳せよ。

(3)「母」は、誰のことか。

答 (1)子供　(2)子供だけでなくその母も。　(3)憶良の妻

「む」は意志を示す助動詞。なお、作者を宴会の主人として詞書（題詞）を「宴を罷（や）めし歌」（宴会を終える歌）と読み、宴会の終了を告げるお開きの歌とする解釈もある。宴会の主人は大伴旅人という説もあり、不明。

9子泣くらむ　「らむ」は現在推量の助動詞。「（家では）子どもが泣いているでしょう」。「らむ」の用法は、①見聞きしていない事柄を推量、②見聞きしている事柄の原因を推量、の二種に大別できるが、ここは①。これは宴席から退出するときの挨拶であるため、実際と合わなくてもよい。

9それその母も　「それ」は漢文における強調の助字「其」の訓読的用語で、「あの、ええと」など、話題を次に展開する語。「その母」の「そ」は第三句の「子」を指し、子の母、つまり憶良の妻のこと。なお、原文の表記は「其彼母毛」となっており、「そのかの母も」と訓む（中西進「万葉集」講談社文庫など）と、「そ」は子を指し、「か」は眼前にない「そちら」の意で、「子のあの母親も」となる。

9我を待つらむそ　「らむ」は前出と同じ現在推量。係助詞「そ」は文末に付いて断定し、強調する意（終助詞との説もある）。

〈補説〉宴席を退出するにあたり、家族が待っているからと、おどけて挨拶した歌であるが、子どもへの愛情を歌った「子らを思ふ歌」（〈参考〉）なども想起され、憶良の家族への愛情がうかがわれる。

〈参考〉子らを思ふ歌

瓜食（は）めば　子ども思ほゆ　栗食めば　まして偲（しぬ）はゆ　いづくより　来（きた）りしものそ　まなかひに　もとなかかりて　安眠（やすい）し寝（な）さぬ

（巻五－八〇二）

同　反歌

銀（しろかね）も　金（くがね）も玉も　何せむに　優（まさ）れる宝子に　及（し）かめやも（巻五－八〇三）

作者

山上憶良

斉明六（六六〇）年～天平五（七三三）年。万葉第三期の歌人。出自不明（百済系渡来人説など諸説ある）。大宝二（七〇二）年遣唐使随員として渡唐。帰国後、伯耆守、東宮侍講を経て神亀三（七二六）年筑前守となり、大宰帥大伴旅人と交流を深め、筑紫歌壇を形成。「万葉集」に長歌十一首、短歌六八首、旋頭歌一首（作者に異説のあるものも含む）のほかに漢詩、漢文作品など多数収録。その主要作品は、旅人との出会い以後、晩年の六年間に作られている。貧窮問答歌に見られるような、思想性、社会性を特色とする一方、生活感あふれる主情的な歌も多い。

鑑賞

作者の妻子への深い愛情のうかがわれる歌というこの歌の捉え方が、時代の変化によって難しくなってきているようである。核家族であるか否かによらず、子育て家庭なのに、妻子を家に残して宴会に参加すること自体が非常識であるという声も、近年よく聞かれるからであろうか。かといって、それを理由にやり玉に挙げられるのではあまりにも憶良に気の毒なので、彼の名誉のためにも〈参考〉として掲げた「子らを思ふ歌」と合わせて、その作風を適切に理解させたい。

文法指導の面からは、「らむ」が基本的に視界外の事柄を推量する助動詞であることを、とてもわかりやすく伝える例としても記憶にとどめさせたい。必ずしも短歌の形式を採らなくてもよいのであるが、助動詞「らむ」を活かしつつ、「誰が何をしているから」、「誰が待っているから」の部分を変えることを軸に、何かの途中でやむを得ず帰宅する旨を同僚や友人に伝えようとする創作ワークをしてみるのもよいだろう。

品詞分解と現代語訳

東歌（あづまうた）

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

作者未詳

多摩川（たまがは）　に　さらす　手作り（てづく）　さらさらに　なに　そ　この　児（こ）　の　ここだ　かなしき

格助・場所　サ四・体　副　副　係助・強意（係）　代　格助・体修　格助・主格　副　形シク・体（結）

（巻十四・相聞・三三七三）

東国地方の歌

多摩川では手織りの布をさらしている。（それこそ）今さらながら、どうしてこの娘がこんなにもたいそういとしいのか。

《主題》

尽きることのない女性へのいとしさを詠んだ歌。

指導上の注意点と発問例

●二五九ページ

問 **「かなしき」（11行目）とは、ここではどのような意味か。**

答 相手の女性が心からいとしい、という意味。語句の研究「かなしき」の項参照。

問 補 **「なにそこの児のここだかなしき」（11行目）を現代語訳せよ。**

答 どうしてこの娘がこんなにもたいそういとしいのか。

語句の研究

●二五九ページ

10東歌　「東国地方の歌」の意で、「万葉集」巻十四全体を統括する標目としてあげられている語。すなわち巻十四所収の二百三十首全てがこれに当たる。実際に集められた歌は遠江・信濃以東の歌である。全て作者未詳で、方言を含んでいたり、庶民的な素材や表現が存在したり、口誦的表現が見られたりするので、東国の民謡などと関わるとされている。ただし貴族的な表現も少なくなく、そもそも全て短歌形式でまとまっているのは、これが民謡そのものでは決してあり得ない証であり、貴族の手が相当に加わっていることは間違いない。掲出の「多摩川に」の歌は、武蔵の国相聞往来九首中の一首。

11多摩川　現在の東京都西部を経て東京湾に注ぐ川。

11さらす　布を漂白するための行為。水で洗って、天日に干すことを何度も繰り返すことをいう。川水の中で布を洗っていることだけではなく、そういう行為の繰り返し全体を指すと見るべきだろう。

11手作り　手織りの布のこと。自分で丹精こ

問　**「さらさらに」という言葉は、その前後の句に対して二重の意味を持っているが、どのような意味か、**
[中](1)**次の説明文の（　　）に当てはまる語を入れよ。**
　上からは、（　①　）の（　②　）という擬態語として、下へは、（　③　）ながら、この娘がどうしてこんなにもいとしいのかという文脈で続く。
[難](2)**簡潔に説明せよ。**

答　(1)①布　②さらさら　③今さら
(2)上からは、布のさらさらという擬態語として、下へは、今さらながら、この娘がどうしてこんなにもいとしいのかという文脈で続く。

問　**「この児」とは、どのような娘ですか。序詞の表現をふまえて簡潔に説明せよ。**

答　川に布をさらして洗っている娘。

めて織った、というニュアンスが加わる。ここまでが「さらさらに」を起こす序詞。「さらす」の「さら」と、「さらさらに」の「さら」が同音であることを媒介にしている。ただし、それは現象的説明であって、和歌のような短詩型文学で、なぜそんな一見無駄に見えることをするのか、何のためにあるのか、という疑問に答えなければ、表面的な学習に終わってしまうだろう。それは難問でもあり、さまざまな考え方があるが、古代にあった「声の文化」に気づかせることは、少なくとも間違いではない。現代でも多くの人の心を結び付けるのに、同じ言葉を一斉に唱えることほど、効果のあるものはない。賛美歌や応援歌などの歌となれば、その効果はいっそうである。歌というものの持つ本質の一つがそこにある。「歌」という以上、和歌も本来は song であった。声は、その場にいる人々の心を共感的に結び付け、ともに生きる場を生み出す。声に出すことによって、言葉は人々によって「生きられる」のである。ただし、何でも声に出せばよい、というものではない。声に出して共感を呼ぶにふさわしい、特別な言葉でなくてはならない。枕詞や序詞は、そういう特別な言葉を作り出す装置であり、約束事だと言い得る。この場合で言えば、「さらす」と「さらさらに」という、思いもかけない「声」の響き合いによって、この歌を聞く人々の心も響き合い、共鳴するのである。「多摩川にさらす手作り」という、労働、すなわち庶民の生活に密着した表現によって、恋人へのいとしさが具体的な切実さを伴って、人々に共有されると言える。

11さらさらに　「さらにさらに」の意で、「新たに新たに、何度でも改めて」ということ。「逢えば逢うほど、見れば見るほど」という意味になる。恋愛の高揚期には、相手の全てが、今初めて触れたかのように新鮮に映るのである。そういう感情が、序詞によって、人々に共有されることになる。

11なにそ　「なに」は疑問の副詞で、「どうして」の意。もちろん疑念を表現しているのではなく、自分の恋情の押さえ難さに対する、詠嘆的表現である。「そ」は係助詞。結びは「かなしき」。

11この　「こ」は近称だから、相手がすぐ近くにいることを表す。

11児　親愛を込めて相手を呼ぶときの呼称。

特に、男が女を呼ぶときに用いられる。

11ここだ　「ここら」のより古い形。数量や程度の甚だしいさま。「こんなにもたいそう」。

11かなしき　「かなし」は本来、身にしみて痛切に感じられる様を表し、悲哀にも愛情にも用いた。愛情の場合は、肉親や男女の間などで、「身にしみていとしい、いとおしい、かわいい」という感情を表す。語幹「かな」は、「…しかねる」の意の「かぬ」と同根とも言われる。それなら、自分の力では到底及ばない、と感じる切なさが大元にあることになる。だから、ここでも、「どうしようもなく、切ないほどいとしい」ということになる。

鑑賞

多摩川の流れる武蔵国は現在の東京・埼玉・神奈川という大都市圏であるが、この時代では間違いなく鄙びた〈辺境〉である。語句の研究でも説明されているように、現在見る東歌がそのまま口誦の世界で歌い継がれてきた東国の民衆による歌とは言えないにしても、特徴の一つであるとされる序詞の表現には、現代の我々にも強い印象を与えるどこか不思議な力があるらしい。

その序詞は一般に、①類音の繰り返しに基づく、②比喩に基づく、③掛詞に基づく、の三種類に分類されるが、この歌においては「さらす」と「さらさらに」という類音の響き合いによって構成されているものであることも、②や③に分類される例と一緒に確認してしまおう。参考までに比較的馴染みやすく、かつ恋の要素を持つものからそれぞれ一例をあげつつ並べていくとしたら、

①多摩川にさらす手作り**さらさらに**なにそこの児の…
②足引きの山鳥の尾のしだり尾の**長々し**夜をひとりかも寝む
③難波潟短き芦の**ふしの間**も逢はでこの世を過ぐしてよとやなどとしてみるとよいだろうか。序詞部分とそれに導かれる言葉を分かりやすく示しつつ、導かれた言葉が序詞によってどのように活かされているのか感じ取らせたい。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

二十五日（はつかあまりいつか）　に　作る（つく）　歌一首（うたいっしゅ）　大伴家持（おほとものやかもち）
　　格助・時間　ラ四・体

うららに　照れ（て）　る　春日（はるひ）　に　ひばり　上がり（あ）　心悲し（こころがな）　も　ひとり　し　思へ（おも）　ば
副　　ラ四・已　存・体　　格助・時間　　ラ四・用　　形シク・終　係助・詠嘆　　副助・強意　八四・已　接助・順偶

（巻十九・四二九二）

二十五日に作った歌一首

うららかに照っている春の日にひばりが舞い上がり、（その一方で）心は切なく悲しいことよ。ひとりで物思いにふけっていると。

《主題》

鬱屈した心情を、春らしい情景との落差自体を表現することで慰撫した歌。

指導上の注意点と発問例

●二六〇ページ

問 **「うららに」（2行目）はどのような様子を言う語か。**

答 春の日差しがのどかでやわらかな様子。

問 **この歌はどこで切れるか。**

答 四句切れ

問 **「ひとりし思へば」の「し」を文法的に説明せよ。**

答 強意を表す副助詞

問 **この歌に詠まれている情景と心情の関係はどうなっているか。**

答 うららかに日が照り、ひばりが空高く上がっていく春の明るい情景と、暗く悲しみに沈んで孤独な心情とが対照的になっている。

補 上句と下句が連用中止法でつながれている一首の形にも注意したい。外を眺め、その明るさに圧倒されて、目を外して一呼吸し、暗く沈んだ我が心を見つめる、そんな作者の息づかいが伝わってこよう。

語句の研究

●二六〇ページ

1二十五日　天平勝宝五（七五三）年二月二十五日。太陽暦では四月七日に当たる。

2うららに　春の日差しがのどかでやわらかなさま。この歌の後に付された左注では「春日遅々」とあり、古辞書「類聚名義抄」には「遅々」に「ウラウラ」と付訓。

2ひばり　スズメ目ヒバリ科の小鳥。雀よりやや大きい。丈の低い草原、麦畑などに住み、春夏の頃地上に営巣産卵する。雄は盛んにさえずりながら垂直に高く上昇、上空

で停止し、鳴きやんで急速に降下する。

2上がり　「のぼる」が上方に行く過程を言うのに対し、「あがる」は下から上へ移る状態をいう（「角川古語大辞典」）。

2心悲しも　「心悲し」は心に何となく悲傷の心情が湧き起こってくるさまをいう。「も」は文末で詠嘆の意を表す係助詞。上代で多く用いられた。これを終助詞とする説もある。

2ひとりし　「し」を間投助詞とする説もある。

作者

大伴家持

没年は延暦四（七八五）年だが、生年については、養老二（七一八）年と元年の二説がある。万葉第四期の代表歌人。大伴旅人の嫡男で、叔母に坂上郎女（さかのうえのいらつめ）がおり、その娘の坂上大嬢（さかのうえのおおとめ）を妻とした。「万葉集」の編纂者と推定されている。

鑑賞

この時代においては孤立例であるという「ううらうらに」を、ひとまず春の日射しがのどかでやわらかなさまと解せるとして、上の句に示される景と下の句に示される心情とがあまりに隔たり過ぎていて、その孤独な悲しみがどのようなものであるのか捉えにくい印象もあるのではないか。景と心情との不一致は、あるいは主体の個の事情に関わる可能性もあると考えて、この歌の左注、

…悽愴の意、歌に非ずしては撥ひ難きのみ。仍りてこの歌を作り、式て締緒を展べたり（痛むこの心は、歌でないと紛らし難い。そこでこの歌を作って、鬱屈した気持ちを散じるのである）…

や作者の状況など、一首の外にある情報を集めてきたところで、妥当性のある解釈を導き出す補助線となり得るかというと、これまたおぼつかない。ただ、この歌が『万葉集』巻第十九を締め括るものであるという事実は、作者家持が、『万葉集』編纂に関与しているとされるだけに、それだけでとても重いものであろう。その意味では、歌集の編纂事情といった大きな問題にも繋がり得る一首であるとも言えるだろうか。

ひばりが高く舞い上がりながら鳴くのは、繁殖期の雄の縄張り宣言行動（揚げ雲雀）としてよく知られる。そのような春の風物詩にただ視線を送るだけで、景のなかにとけ込めない鬱々とした思いは、左注によれば歌作という営みによってのみ慰められているという。そうであるとすれば、空高く舞い上がるひばりの姿に、直面する現実からの逃避願望などという感情移入は、あまり積極的に見出そうとする必要はないのかもしれない。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

防人歌（さきもりうた）

（巻二十・四三四六）

父母（ちちはは）が　頭（かしら）かきなで　幸（さ）く　あれ　て　言（い）ひ　し　言葉（けとば）ぜ　忘（わす）れ　かね　つる

格助・主格　ダ下二・用　副　ラ変・命　格助・引用　八四・用　過・体　係助・強意（係）　ナ下二・用（ラ下二・用＋補助）　完・体（結）

父母が頭を撫でて「達者でいろよ。」と言った言葉が、忘れられないことだ。

《主題》

防人としての旅にあって、自分の無事を祈りながら送り出してくれた故郷の両親の優しさ、愛情を思い出して詠んだ歌。

指導上の注意点と発問例

●二六〇ページ

問　**この歌は、どのような折に詠まれたものと想像できるか。**

答　防人にゆく作者が両親の元を離れ、旅の途次に詠んだもの。

補　上三句までの臨場感に注意したい。両親が頭を掻き撫でるさま、「幸くあれ」と声をかけるさまがまざまざと浮かんでくる。しかし、これは、防人に出た作者が「忘れかね」ているからである。歌からはどこで何をしているのかは分からないが、彼の頭には両親の言葉、撫でてくれた感触が反芻されているのだろう。両親と離れてすぐではなく、旅が進んだ時の歌と読める。

問　**「万葉集」の歌集の表現の特徴をまとめよ。**

答　率直で具象的であり、また大らかで力強く、生命感にあふれている。調べは五七調が中心で、二句切れ・四句切れが多い。枕詞や序詞が多用された。枕詞も序詞も、表記のための文字を持たない「声の文化」の時代の所産であることに注意したい。枕詞は呪文のように大事な言葉を呼び起こし、序詞は消えてしまいやすい感動を皆で共有するために必要な約束事として、それぞれ発生・機能していたと考えられる。

語句の研究

●二六〇ページ

3 防人　北九州を中心とする西国防備のために主に東国諸国から選抜された兵士。天智二（六六三）年の白村江（はくすきのえ）における敗戦を機に唐・新羅による侵攻を想定して整備・制度化が行われた。任期は三年の交替制。この歌は、天平勝宝七（七五五）年に筑紫に派遣された防人が詠んだ歌の一つである。

4 かきなで　「かき」は接頭語。頭や髪を愛撫してなでる。

4 幸くあれて　「さきくあれと」の東国方言。「て」は格助詞「と」に当たる上代の東国

方言。

4 言葉ぜ　「ことばぞ」の東国方言。「ぜ（ぞ）」が係助詞で係り結びをつくる（結びは「つる」）。これら東国訛りの語のもたらす臨場感に注意したい。ただし、こうした方言が実際をどこまで反映しているのか、筆録者の取捨選択があるのかは定かではない。

鑑賞

歌に方言があることで驚く学習者もいるかもしれない。しかし、詠われているのは旅路にあって思う両親のやさしさ、愛情であり、学習者には分かりやすい気持ちだろう。

まず、この歌がどのような状況下で詠まれたかを押さえておきたい。防人は、東国から選抜された兵士が、はるか遠く北九州まで行き、そこで辺境の警備に当たったものである。選抜された者は三年の任期（実際はあまり守られていない）を、故郷を遠く離れた地で過ごさねばならない。過酷な旅で、無事に故郷に戻れない者もあるし、何らかの事情で任が解けても故郷に戻らない者も多かったという。防人歌に、送り出す者の愛情、残してきた者への愛情を詠んだものが多いのも分かるだろう。

この歌では、送り出す両親の愛情が上三句で、残してきた両親への思いが下二句で詠まれ、一首のうちに双方の思いが込められている。親子の情愛の強く伝わる一首である。

巻二十に収められた防人歌は九十三首で、この歌は天平勝宝七年二月の防人派遣の折に、各国の引率者（部領使）を介して兵部少輔だった大伴家持のもとに集められた八十四首のうちの一首。家持は左注で各国の防人歌に歌数を記した後「拙劣」な歌は載せないと述べており、防人歌の編集に携わっていたことが分かる。